

好きから始まらなくても

第17期 OG 江碕 舞香

2024年12月15日、大学3年生の頃から5年間に渡り支え続けてくれている第17期の同期、森直也さんと入籍したことをこの場を借りて皆さんにご報告させていただきます。私たちの結婚は、小野ゼミを築き上げてくださった小野晃典先生や歴代の先輩方、そしてたった3人の第17期についてきてくれた第18期をはじめとする後輩、皆さんの存在のおかげです。心より感謝申し上げます。

私は、森くんと過ごした5年間を通じて、夫婦は、必ずしも恋愛的な“好き”から始まるわけではないことを知りました。この場をお借りして、この5年間の思い出を振り返らせていただきます。

◆森くんから逃げることに必死だった11月

遡ること5年前、私は、明らかに好意を寄せてくれている同期の森くんから、どうしたら告白されずに済むか、必死に考えていました。というのも、当時は13人いた同期のうち11人がゼミ辞めるという非常事態が発生し、森くん自身もゼミを辞めるか迷っており、私は、自分が森くんの好意を断ることで、森くんがゼミを辞めてしまわないか心配だったのです。2人で出かけた別れ際、「もう少し話できる？」と告白されそうになるたびに、私は、「ごめん！千葉だから終電はやくて！帰らなきゃ！」と嘘をつき、逃げるように帰っていました。21時台に。「どんな田舎だよ！」と、自分でツッコミを入れながら、逃げるように駆け足で階段を登っていました。

◆気づいたら付き合っていた12月

そんな日々が続いていた頃、夜中に電話をする機会がありました。最初はとりとめもない話をしていましたが、そのうち、この非常事態の中で、互いの存在がどれだけ心の支えになっているのかという話になりました。そして森くんは、涙ながらに、私の好きなところを話してくれました。そして最後に、「付き合ってください」と言ってくれました。私は、あれだけ逃げていたのに、恋すらしていなかったのに、気づいたら、何かに導かれるように「はい」と返事をしていました。あの時の記憶は今でも鮮明で、本当に自分の意思ではない何かが、「はい」と返事をしている感覚でした。きっと、私が「はい」と返事したのは、森くんが、私のことを女性である前に、1人の人間として好きなことを伝えてくれたからだったのだと思います。そして、その森くんの好きな私は、私の好きな私でもありました。周りに何と言われようと、私らしくいることを諦めなかった姿を、森くんはちゃんと見てくれていた、あの時はその事実が、ただただ、心の底から嬉しかったのだと思います。

◆好きから始まらない“好き”

付き合い始めたものの、恐らく1年間くらいは森くんのことをそれほど好きではなかった気がします。もちろん、人として信頼、尊敬していて、安心できる存在でしたが、何といいますか、異性としてときめくような好きはありませんでした。というのも、そもそもタイプではなく(※スタイルはタイプだった)、服は恐ろしい程にダサい上に、エスコートもなく、異性としてときめく要素がなかったのです。このエッセイを読んでいる方の中にも、同じように思う人がいるのではないのでしょうか。「人としては好きだけど、異性としては…」という文句で語ってしまう人が。

それでも、私は森くんに対して、普通の好きとは違う、“好き”という感情を抱いていました。それは、異性としての好きよりはるかに深い、人としての信頼と尊敬に近い“好き”だったと思います。気づいた時には、私の心は森くんへの“好き”でいっぱいになっていました。恋愛的な好きではないかもしれないけれど、ふたりで過ごす時間の中で育まれる、尊敬や信頼から成る“好き”が、5年間を経て少しずつ大きくなっていきました。(そして5年間ゆっくと時間をかけて、私のタイプになってくれました♥笑)

◆5年間の時を経て

恋から始まった“好き”ではなかったけれど、今、私は森くんのが大好きです。空き時間にはいつも勉強しているような努力家なのに、謙虚で他人に優しい森くん。辛いことがあっても、決してめげずに、立ち向かう森くん。私の夢を、自分のことのように応援してくれる森くん。そして、私とこれからの人生を歩むことを選んでくれた森くんが、大好きです。これからも、ふたりだからこそ育める“好き”を、大切に積み重ねていきたいです。森くん5年間たくさんの愛をありがとう。これからもよろしくね。



◆お祝いして下さった小野ゼミの皆さま、本当にありがとうございました

私たちの結婚に際し、保証人を引き受けて下さった小野晃典先生をはじめ、貴重なゼミの時間を使ってお祝いしてくれた後輩の皆さま、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



12月13日の本ゼミにて（著者は上段左から5番目）